

インドのセキユリティー

● 放眼日中 ●

先日、インドのデリーで同国に在住して20年を超える日本の方から「インドは必ず発展する。ただ、そのスピードは普通の日本人が考えるほど速くはない。インドという国は1000年単位、場合によっては10000年単位で考えなければ理解できない」という話を聞いた。

確かに、デリーは他のアジアの都市同様に地下鉄が発達し、市街地が郊外に延び、グルガオンのショッピングセンターなどは買い物客で溢れていた。空港もきれいになっていた。しかも以前のデリーを知っている人からすれば驚きのエアポートエクスプレスまで開通し、ニューデリー駅から空港までわずか18分で行けるようになっていた。

しかし、そこはインドだ。エアポートエクスプレスは香港などと同様に市内駅で搭乗チケットインができると宣伝していたものの、実際に行ってみると、チケットインできるの

は国内線だけ。そして、エクスプレスの写真を撮ろうとホームで構えていると、関係者からこれも阻まれる。すべてはセキユリティー上の対策だそう。航空会社の職員はこれを「インターナショナルルール」と言っている。この国は現在テロ対策に重点を置いており、筆者がインドを訪問している間もムンバイでテロがあったため、致し方ないことだとは思うが……。

セキユリティーといえば、「インドのチベット」とされるインド最北部のラダックを訪問した際、空港では入り口でのチェックが2回、チェックインから搭乗まで荷物検査を含めて5回の合計7回もチェックがあり、驚いた。国内線に乗るのにこれほどの厳しい管理は異常だが、それがこの地域（チベットやパキスタンと国境を接する領土紛争地域）の実情である。

とはいえ、ラダックには今や中国

側チベットでは失われてしまったチベット仏教、伝承医学が継承されており、大自然の中に世俗化を免れたコミュニティが存在していた。殆ど雨が降らない標高3500mの高地で、昨年大洪水があつて多大な被害が出たという、復興作業があちこちで行われていた。

洪水の原因について「世界的な自然破壊による気候変動である」と現地では子どもでも言っているが、決して誰かを非難するわけではなく、黙々と各人ができる復興に取り組んでいる姿に感動した。自らに起こった災害を「天からの警告」と素直に受け止め、「ポジティブ（前向き）」に「インプルーブ（向上）させる」姿勢は凄いと感じた。

災害には天災と人災があるという。ことは、今回の東日本大震災後、日本でもよく語られているが、この世界を見ていると、俗世で行われている開発という行為が「まったく自然



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

と向き合っていない」ことに気付く。宗教なども絡み、人間自らが自らを破壊する行為を行い、災害や侵略を恐れてセキユリティーを強化する。ラダックにいた時、とても違和感があった。

ある日本人曰く、「インドではあらゆるものを見ることが出来る。人種・宗教・文化・社会、もちろん天国から地獄まで」。続けて「インドでは、ここで生きていくだけで価値があるんだ。この人間くさい、泥くさい社会で。今の日本人を含む先進国の人間には、本当に生きていくという実感がないのではないか」。

最近、インドへの観光客が急増している中国。彼らの目にはインドがどのように映るのだろうか。中国人がインド人を苦手とするのは「頑固で譲らない」ところにあるという。経済発展のためにすべてを犠牲にする感覚は、流石にインドにはないようだ。